文芸作品コンクールの詩に応募しよう。（保護者・初・中等校部 募集期限(五月四日)）

詩は、普段お話をしている日本語で「お母さん」や「お父さん」に**お話しするように書けばいい**ず。ひとつの場面を切り取って（十五秒のテレビコマーシャルのように）、伝えたいことだけ**書くのです**。**「聞こえたまま」「したことを順番に」**です。これは**作文と同じ**です。詩を作って応募しましょう。

【書き方①】できるだけ形容詞（楽しい）（嬉しい）など

その方が読む人に分かりやすくなります。

赤い風せん　　ロサンゼルス 細川 澤峻碧

わたしが、赤い風せんをお店でもらった。
弟にあげたら、弟が風せんをもってお店の中を
歩き回った。
いつもお店に行くと走り回って大声を出している。
弟がにこにこしている。
買いものが終わった車にのる。
車にのる時に、弟が風せんから手をはなした。
風せんが車のやねの上に上がった。
お母さんがジャンプした。
風せんは、どんどん小さな赤い点になっていった。

【書き方②（例えば）擬人法（人に例える）を使います。気持ちが読む人に伝わります。

氷につつまれたえだ　　シカゴ日本人学校 土岐 茉里奈

きれいな氷につつまれた木に出会った
昨年の冬

わたしは
お姉ちゃんといっしょに
家のうらにある
きれいな氷につつまれた木に出会った

つるつるしていて
とってもとってもつめたくて
ダイヤモンドみたいに光っている

さむそうにしているそのえだに
そっと話しかけてみた
その木はこたえた

冬は氷にまもってもらっているの
氷はとってもとっても温かいの
毎年　毎年
氷はわたしをまもりに来てくれているの
わたしはそれが
とってもうれしい

シカゴの冬はさむいけれど
わたしの家の木たちにとって
それはすてきな冬なのね

シカゴの冬はさむいけれど
わたしの庭の木と氷
わたしの庭の
すてきなかがやきに
なってくれている

文芸作品コンクールの詩に応募しよう（保護者・初・中等部の皆さんへ）　　ニュージャージー補習授業校

書き方①～⑤の技法を一つか二つ使って書いてみましょう。「学ぶ＝真似ぶ＝真似をする」です。

【書き方③】会話「　」を三～四つ書きましょう。生き生きとした表現ができます。

とんぼ　　ミネアポリス補習校　小一　福田　麗澄

ままが
「しいっ。」っていった。

いもうとに
「しずかに。」っていった。

わたしも
しずかにした

しんぞうのおとが
きこえるくらい
しずかにした。

そっととんぼのはねを
つかまえた。

うれしくて
「やったあ。」
といいたかったけど
がまんした。

ついにわたしは
とんぼをつかまえた。

ゆびのさきに
とんぼをのせて
「ばいばい。」
っていって
にがしてあげた。

【書き方④】繰り返しを使ってみましょう。感動が強調され印象的に伝わります。

窓から見える景色　　イスラマバード日本人学校　中三　小林　和彦

窓から見える景色には
光に当てられキラキラと輝く葉
風の奏でる音
涼しそうに舞っている。

窓から見える景色には
工事している空港への道
土煙が視界をさえぎる
切り倒されていく命を守る木々

窓から見える景色には
広い校舎の一角で野球をする子ども達
金属バットで玉を打つ音
暑い中　元気いっぱい遊んでいる

窓から見える景色には
暗闇の中の閃光
機銃の音が聞こえてくる
流れ弾への恐怖

【書き方⑤】現在形で書いてみましょう。読み手が作者と同じ場面にいるように伝わります。

言葉　　ポート・オブ・サクラメント補習校　中一　竹越　夕子

ペンを紙にかざすだけで生まれる
大切な
かけがえのない言葉。
何よりも不思議な力を持つ言葉。

読んだ瞬間
あっという間に好きな所へ行ける。
日本へ里帰りができる。
宇宙にだって飛んで行ける。

言うだけで心を暖め
人と人をつなぐ言葉。
作るのも使うのもこんなに簡単。
紙とペンで
もう望みがかなえられる。